



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	育児期における共働き夫妻の役割遂行効果：質的ペアデータで見られたこと
Author(s)	孫, 詩彥
Citation	教育福祉研究, 22, 43-51
Issue Date	2017-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67824
Type	departmental bulletin paper
File Information	43-0919-6226-22.pdf



育児期における共働き夫妻の役割遂行効果 —質的ペアデータで見られたこと—

孫 詩 彥

1. はじめに

本研究の目的は育児期の共働き家庭において、どのような役割遂行が配偶者の負担を減らし、満足度を高めるのに効果的であるのかを当事者の報告を基にして分析することである。

男女の家庭内役割分担が不平等であることはこれまでの研究で繰り返し示唆されてきた。女性の意識の変化と社会進出とともに、共働き家庭が増えた。男性の育児が推奨される中で、実際の家事育児参加時間は増加したが、なお低調である（李2008）。女性は役割過重になりやすく、社会に進出した女性は二重役割を果たすために心身とも負担が大きくなることが批判を受けてきた（ホックシールド1990）。特に子どもが生まれてから家庭内役割のニーズが大幅に増え、役割分担の再調整が求められる。バルスキー・ケリー（1995）の研究では、その時期に今まで保ってきた夫妻関係の均衡性が崩れやすく、喧嘩が多発し、離婚に至ることも報告された。

家庭内の役割分業を規定する要因からみると、夫妻間の相対資源格差が縮小する場合、分担もより平等になると考えられる。しかし、共働き夫妻に着目した永井・松田（2007）によると、女性の就業は夫妻の対等につながらず、むしろ意識的に平等を求めるほど夫妻間の役割調整が必要とし、かえって夫妻に葛藤感をもたらしってしまう可能性がある。この点はPiñaとBengtson（1993）が示唆した「常勤の妻がそうでない妻よりも、夫からの支援が少ないと感じることが多く、これが妻の夫妻関係満足感、および個人的な満足感を低めていた」（末盛・石原1998：40）と共通している。

したがって、夫妻間の役割分担が平等的なのか伝統的なのかを評価する前に、配偶者の期待に応えるような分担や遂行はどのようなことなのかが再考を要する。本研究は、育児期という葛藤の多い時期に着目し、役割分担と遂行の効果が高く求められる共働き家庭では、どのようなことが配偶者の負担を減らし、満足してもらうに有意義であるかをアプローチする。

2. 先行研究

（1）満足度と負担感

夫婦関係の研究は役割、勢力、情緒の構造をめぐって展開するものが多く、ここでは情緒の関係に着目して満足度と負担感を取り上げる。末盛・石原（1998）は女性の社会進出を背景に夫の家事遂行と妻の夫妻関係満足感¹⁾をめぐり、日米の比較研究という視点から考察を行った。その結果、両国の違いがあまり見られず、夫の家事遂行が妻の夫妻関係満足度に対して有意な効果を持っていることを指摘した。ほかには末子の年齢や女性の勤務時間、分業意識などに関連することが示された。末盛（1999）が日本をフィールドにした調査結果を用い、家事遂行だけではなく夫による情緒的サポートの効果を検討した。この点で妻の満足度と関連性を示し、主に職業による評価がなかなか得られない専業主婦は自ら家庭内の役割を行い、夫に評価してもらうことが示唆された。

その後、大和（2001）が女性の所得、木下（2004）が子どもの年齢によるライフステージにそれぞれ焦点を当てて議論した。李（2008）はこれらの研究に基づき、さらに夫の家事遂行に対する妻の役割期待を変数として導入し、検証を試みた。その

結果、妻の期待が満たされるほど満足度が高くなる。この効果は妻の就業形態などに関係なく一貫して見られ、夫の参加のみならず、妻の期待とのズレに注目することが有用であると示唆された。この一連の研究は共働きの夫妻に限らず、専業主婦家庭も対象としている。また、議論の視点は役割分担や遂行の効果そのものではなく、あくまで男性が家事育児にかかわることで夫妻関係の満足度にどれくらい寄与したかを検討した。

役割の遂行に着目して夫妻間の対等関係を考察した。ホックシールド（1990）は女性の二重役割を批判し、役割遂行が「加速化」されたと指摘した。家事や育児をするとき、「いつなにをするかをコントロールする難易度」でストレスが生まれる。また、岩間（1997）は延期可能と延期不可能な家事を二分して検討を試し、夫が家事に参加するほど、延期可能性が高くなり、妻のストレスや不公平感が低くなると確かめられた。

末盛（1999）や李（2008）の研究を批判的に捉えつつ、岩間（1997）の主張を取り入れて松信（2011）は共働き夫妻を対象に、「夫の家事育児遂行に対する妻の満足度の規定要因」を検討した。夫の遂行程度と情緒的サポートが主な規定要因であるが、対象を絞り視点の精緻化が有意であると評価される。これら一連の研究によると、少なくとも妻の立場からみて、夫の役割遂行に対する満足感が夫婦関係の満足感とかなり一致していることが推測できる。

なお、量的調査の二次分析による研究が多い中で、藤田（2014）は記述回答を用い、妻の家事負担感と夫の家事遂行を議論した。妻が主に負担と感じる家事は掃除と食後の後片付けであると明らかになった。そして負担感を生み出す要因は前述の夫妻労働時間や末子の年齢よりも、夫の家事遂行にある。夫のやり方に文句をつけることでストレスを感じることを示された。女性の下支えが必要とされる男性の分担が女性の負担を減らすのに有効であると言にくいことが示唆された。

（2）問題点

先行研究をレビューした結果、いくつかの問題

が見えてきた。第1に、全国家族調査など大型の量的データを用いることは規定要因との相関関係を説明し、傾向を示すに有効であるものの、具体的な私的場面でどのような分担が効果的であるのかが説明されていない。夫の分担も情緒的サポートも結果的に妻の満足度につながっていたが、どのような形でつながるのかに関する検討が十分ではない。

第2は量的調査の限界と関連する。質問項目の設定にさらなる工夫が求められる。しかし、ホックシールド（1990）が指摘したように、子どもを産み、家庭内役割が大幅に増えて生活リズムも速くなる中で、並行作業もよくなされている。特に家事と育児を同時にする場合、子どものニーズは往々にしてその場ですぐ対応しないといけないものであるため、ストレスがたまったり負担を感じたりすることも多いと考えられるが、これまでの研究はそれに触れることが少ない。

第3は女性のみが研究対象になる傾向であること。これは家庭内役割分担の研究に限らず、ジェンダー研究などで共通してみられる点である。女性の満足度や負担感などをめぐる研究が多くなされるが、家庭生活ではもう一人の主体である男性も満足しないとうまくいかない。そのため、役割分担と遂行の効果を議論する際は男女両方から配偶者の行動を評価してもらう必要がある。

3. 方法

前述の先行研究と問題点を踏まえ、本研究では配偶者の負担を減らし、満足度を高める遂行活動の有り様を描くため、育児期の共働き夫妻両方を対象にそれぞれ半構造化インタビュー調査を実施した。配偶者の分担や遂行に対する評価、期待などを語ってもらい、夫妻のペアデータを集めた。

（1）調査方法

調査²⁾は平成28年（2016年）8月に実施した。対象者となる夫と妻にそれぞれ1時間から1時間30分程度の個別インタビューを行った。

政令指定都市X市の認可保育所Aを介し、第一子が入園している世帯の保護者に調査への協力

を依頼した。同意を得た5組の夫妻、合計10名の方に調査を行った。調査は協力者それぞれの都合に応じて場所を調整し、プライバシーが守られるところで実施した。

主な調査内容は三つの部分で構成される。Ⅰ基本情報：①年齢、学歴等の基本属性と勤務状況、②平日と休日一日の流れ、Ⅱ役割分担：③現在家事育児の分担状況、④今の分担に至るまでの決め方、Ⅲ役割遂行：⑤自分の役割だと思うこと、遂行の仕方と工夫、⑥現在の分担、自分と配偶者の遂行に対する評価。本研究は主に「Ⅲ役割遂行」のデータを用いる。

本調査（「都市部における共働き夫妻の家庭内役割分担研究」）の実施およびそれに関する研究分析について、北海道大学教育学研究院研究倫理委員会の審査を受け、承認を得た。倫理的配慮および人権・個人情報の保護については北海道大学

教育学研究院の研究倫理規定を遵守し、必要な対策と措置を講じた。

（２）調査協力者のプロフィール

調査協力者の基本情報は「表1—基本情報」の通りである。

本調査の協力者は男女とも全てが正規雇用（C0自営業）である。男性はすべてシフト制勤務であるのに対して女性は時短勤務（C0は自営業）をしている。子どもを含め、全員健康である。協力者の年齢は30代後半から40代前半で、短大またはそれ以上の高学歴者が多い。ほぼ持ち家で、男性の所得は女性より高い。この理由の一つに、女性は時間短縮の分で給料が下がったことがある。

家庭内役割の遂行に関しては、男女両方の分担と夫妻の関係性がうまくできている家庭がこの度の調査に応じてくれた可能性が高いと考えられる。すべての家庭が夫妻と子どもで構成する核家

表1 基本情報

No. ^①	年齢	学歴	家族構成 ^②	職種 ^③ (雇用形態)	勤務時間	残業時間・休日	税込年収 (万円)
A1	40代前半	高卒	夫妻、 二子○	輸送・運転職 (正規)	週6回、 シフト制	あり、冬多め 平日一日休日	300-400台
A0	30代後半	短大卒		専門・技術職 (正規)	週5回、 シフト制	基本なし 基本土日休日	400-500台
B1	40代前半	大学院卒	夫妻、 二子○	事務職 (正規)	週5回、 シフト制	あり 週二日、休日不定	700-800台
B0	30代前半	高卒		事務職 (正規)	週5回、 時短勤務	基本なし 土日休日	300-400台
C1	30代前半	専門卒	夫妻、 二子×	サービス職 (正規)	週4回、 シフト制	基本なし 週二日、休日不定	300-400台
C0	30代半ば	短大卒		販売職 (自営業)	週3、4回	基本なし 土日+平日不定休	300未満
D1	40代半ば	大学卒	夫妻、 二子×	専門・技術職 (正規)	週5回、 シフト制	あり 週二日、休日不定	1000以上
D0	40代前半	大学卒		専門・技術職 (正規)	週5回、 時短勤務	基本なし 土日休日	800-900台
E1	40代前半	大学卒	夫妻、 一子	専門・技術職 (正規)	週5回、 シフト制	週二日残業 土日休日	500-600台
E0	30代後半	大学卒		専門・技術職 (正規)	週5回、 時短勤務	基本なし 土日休日	400-500台

①協力者 No. のアルファベットはカップルを意味し、数字1は夫、0は妻を意味する

②子どもが二人いる場合、年齢上子ども同士で遊べるのは○、遊べないのは×

③厚労省職業分類表参照。

族であるが、近居の祖父母に支援されていると同時に、とりわけ女性のほうが職場からのサポートを得て社会的サービスや時短家電を利用していることが分かった。家庭内の役割分担について、男性のみ就労している家庭より、本調査の男性たちは積極的に関わっている。すべての男性が育児に積極的であり、家事も掃除、洗濯、料理という主な三つ³⁾のうち二つ以上を分担している。

(3) 分析枠組

本研究ではペアの質的調査データを基づき、男女両方から効果的な分担行動を検討する。これからは調査の結果を示しつつ、考察を行いたい。使うデータは主に協力者が自分の役割遂行や配偶者との協力を語る時、または相手の行動を評価し、どのような分担を期待しているのかを述べる時の話である。

調査では、男性の分担が共働き家庭で進んだにもかからず、女性が家庭内役割の多数を担っていることが変わっていない。しかもほとんどが第一子出産の後、妻の働きかけによりはじめて夫が分担するようになっていく。そのため、女性は男性のさらなる分担を期待することが多い。一方、本調査の男性たちは比較的に分担の意識が強く、女性の役割遂行を肯定的に評価するものの、もっと自分にやらせてほしい声も聞かれた。

したがって以下からはペアデータという本研究の特徴を最大限に生かし、家族単位で夫妻の話を提示する。一方、対象者一人一人が当事者であり、男女両方の分担と遂行に対する評価に着目する必要もある。そのため、本研究の分析は李（2008）の視点を受け継ぎ、夫妻間のズレに目を向けながら、配偶者に対する評価が否定的か肯定的かに着目しながら議論を進める。

4. 調査結果

データは主にインタビューを文字起こしして引用するものである。会話のアイズチを削除した。文脈をわかりやすくするため、前後の文章に出た内容的にかかわることは「()」マーク付きで補足する。「…」は一部省略を意味する。

(1) 夫妻間のズレによるマイナス評価

配偶者に対する期待と実際の遂行状況の夫妻間のズレが大きいと、満たされていない側の分担への評価が下がると考えられる。ズレが生じる多くのパターンは妻が高く期待するのに夫の分担がそこまで達していないことである。また、本調査では役割分担の最も平等であるCにおいて、妻がより高く期待したため夫に不満を持つ一方、夫がより多く分担したいのに妻が家庭内役割に対する責任意識で葛藤を感じるとの報告があった。

通常のパターンから説明する。A1は子どもに親しまれているため、寝かしつけなども含めてよく分担している。ただし、仕事上の都合で家にいる時間が少なく、さらに料理もできないため家事の分担が洗濯や掃除などが限られていた。A0が夫の分担を語る時、「一つ一つしかできない」ことを指摘した。

A0：例えば、全部自分だと、茶碗を洗いながら、こっちのゴミも片づけながら、なにになにしながらって、全体をこう回しながら、時間とか察しながら動くけど、彼は一個、お茶碗洗いましたとか、ゴミ捨てましたとか、そういう一つ一つしかできない。

そのため、A0が常に全体を把握しつつ、やっていないところをチェックする。また、A1ができないことや全部うまくできていないことはA0がフォローしていく。ただ、A0が期待を持つにもかかわらず、A1は元々家事などをやらないタイプで、子どもが生まれてやるようになったこと自体が満足でA0は「そこは大目に見ながら私がやる」と語っていた。一方、そもそも分担をよくしているCの家庭では、C0が夫に対する期待がより高くなり、指摘も厳しくなる。夫のやり方に対する批判で子どもを二人同時に見てもらえないことが語られた。

C0：例えば散歩に行ってもどちらかし連れて行かないですね。…下の子がまず歩けないので、

上の子と遊びするときはずっと抱っこしなきゃいけないので、それも遊びの妨げになるから、いつも気をつかっておいていいよって言うんですよね、…(そうしたら)「いやいいよ」って連れてってもらわず、置いてっちゃう。

この点に対して、C1の話では自身なりの考えがあると分かった。子ども一人を相手にすれば、その子の好きなことやできることなどをもっとしっかり見られるとのことである。なお、C家の子どもが寝るときC1を拒否しC0にねだっているため、最近寝かしつけもむずかしいという事情があり、「公園でいっぱい遊ばせて疲れさせてはいます」との考えでC1が間接的に妻の負担を減らそうとしている努力が見られた。こうしてC1が家庭内の役割に対して強い分担意識があり、しかも料理ができないA1の状況と違ってC家の夫妻両方が家事に苦がないと述べていた。けれどもC1が家で料理をしようとして買い物などをする時は金銭的な問題や食料の在庫などで妻に言われることがあった。

C1:(買い物は)ほとんど妻ですね、僕は行きたいは行きたいですけど、…金銭的な問題と、冷蔵庫の中に入っているものと合わせて作らなきゃいけないので、…僕はいろいろ買ってきて、在庫を増やして、…そのためにちょっと困ることはあるけど、がっかり、へこむことがあります。作っているけど文句を言われてしまうのがちょっとね。

このような夫妻間の認識にあるギャップはある意味でコミュニケーションを増やせば解決につながると思われるが、Cの夫妻も含め、今回五つの家庭はいずれもコミュニケーションをよくしているほうだといえる。ただ、話し合いの内容と方法によって効果が異なる。次は意思疎通によって分担の評価が上がるケースを提示する。

(2) コミュニケーションによる理解

引き続きCの事例を挙げる。前述の例で話し合いが足りないところもあると分かった一方、全

体的にみれば夫妻間の共同作業がうまくできていると妻たちが評価した。C家の分担は夫妻両方ともやる意欲が高く、家にいる時間も長く、実際にも平等にできている。そのため、あえて役割を決めず、手が空いたらやる。互いにやったことを確認し合いつつ、できなかったことに対しても強く責めたりしない方針があった。こうしてコミュニケーションを積み重ねていくうちに分かったことは、やってほしいことは直接言うほうが早いという点である。

C0: やってっていいですよん、最初は言えなかったですけど、やってほしいことは言うほうがすぐ伝わるから最近もうなんか、やってほしいことすぐそのまま直接言って、遠まわしにそういう雰囲気を出すじゃなくて、気づいてもらうよりはもうこれやってって、やってもらったり。

C1のほうも「言ってもらえると分かりやすいから助かります」(C1)と述べていた。さらに、時々妻に怒られたりすることも「それは日ごろの疲れがたまると発散するために言っているのかと考えると我慢すべきかなあとおもうですよ。いつも子どもたちのことを考えているから、それに対するストレスを僕にぶつけないと思うので」(C1)と理解を示した。このような行動は先行研究の指摘通り、情緒的サポートとして有意義である。

C1と同じように、ほとんどの場合、男性は家庭内の主役ではなく、家の事情などもよく把握していなかった。ゆえに妻にははっきり言ってもらうほうが分かりやすいという話はほかの協力者からも聞かれた。E家は夫妻二人とも比較的伝統的な分業意識を持ち、男性の遂行レベルが低いが女性側の期待もそれほど強くないため、夫妻間のズレが小さい。育児の事は二人でよく相談し合うが、家事については「基本的にはやってほしいことは言ってくださいと妻に話をしているので、だったらこれやってほしいあれやってほしいっていうのは自分ができることとなります。基本的にはやるようにしています」(E1)。と述べられた。これに

対して妻の E0 も「なるべく言うようにして、言わないでこれやってほしいなと思うとストレスになるから」(E0) と報告した。

さらに、夫妻間のコミュニケーションは日々遂行している役割に限らず、その場で頼まれたことの目的を理解し、より効果的な遂行が期待できる。前にホックシールドの示唆に触れたとき、家事と育児を同時に進ませることが難しいという知見があった。実際の調査においても、家事と育児の並行作業を避けるため、女性が男性に一時的な役割遂行を求める時がある。普段からの話し合いで並行作業や子どもに邪魔される家事の困難さを理解する男性がそういう時女性の意図をより明白に理解し、効果的な分担もできるようになる。例えば B 家では「二人がそろっていたらどっちかが家事をして、どっちかが子どもの相手をするとかっという感じで」(B0) 進め、D 家では「パパがいてくれるだけでうまく進めるからすごく助かるんですよ」(D0) と報告があった。

(3) 独立性と自発性が求められる遂行

最後は日常の役割分担について調査結果を提示する。B 家と D 家はどちらも男性の遂行レベルが高く、比較的に妻の期待が満たされている家庭である。特に話し合いで役割分担を決めつけたわけではなく、両方の勤務時間など都合を合わせてペースをつけたのが B 家である。B1 は料理と洗濯を分担し、子どもに読み聞かせをする主役でもある。ほかに子どもの遊び相手だけではなく、世話役割も担っている。「妻がやりたいことに合わせて僕は柔軟に対応しているほうだと思います」(B1) という形で B0 の期待が満たされた。夫妻ともできないことがあまりなく、自らの長所を生かしつつ、短所を補うための相談もしていた。例えば B0 がピアノが得意だから子どもに教えたり、肉系の料理が上手だから作ったりすることが多い。それに対して B1 が仕事の都合でよく子どもの絵本を借りるし、家電などの修理も専門知識をもってしていた。さらに女性は子ども向けに料理を作る方法など自ら習得するが、B1 もそういった料理作りや普段の家事育児で分からないことが

あれば自ら「インターネットはよく使って調べたりしますね」(B1)、または子どもに好きなものを聞いたりして努力している。また、B1 だけではなく、C1 も子どもの寝かしつけなど多くの人と相談し、何とかしようとしていることが調査で分かった。

この点については前述の藤田 (2014) の研究で指摘された通り、下支えを常に必要とする遂行は女性の負担軽減からして望ましくない。一つの役割を遂行する時、配偶者に多くのフォローを求めず、自力でできる、もしくはしようすることが聞き取り調査で妻たちに評価されていた。

これと相関してもう一つは遂行する当事者の自発性である。今回の調査ではこの点も多く女性の評価された。D 家の場合、男性側が単身赴任で一時期家を留守にしていた。それが終わって帰ってきた D1 は妻に対する「申し訳ない」感じがありながら、もともと D1 の父親が家庭内役割をよく担う方で、抵抗感なく D1 も積極的にやろうとしている。仕事上の都合で家にいる時間が限られていたが、「(帰ってきたら) お互いにこういうこととしてほしいけど、向こうが気づかなかったりこととあって、いらいらしたこととあってちょっとした喧嘩になることはもうしょっちゅうあるので、喧嘩もコミュニケーションの一つなので」(D1) と妻に交流を深めている。今は洗濯をほぼ全般に担当し、掃除も分担している。「子どもがいなくて、夫が休みだったり、半日家にいたりしてくれた時のほうが部屋とかきれいになります」(D0) が妻に評価される。また、買い物は「積極的に行くので、なんかたりないものあるってメールがくるので、じゃこれ買ってって感じで買ってもらっていますね」(D0) という形で分担している。調査当時はまた、シフトの調整をして料理も分担したいと夫妻二人ともが述べていた。

このほか、A1 は家事など一つ一つしかやらないが、最近ではやるが増え、妻のやり残しを自発的にやってくれるようになったことが A0 に好評された。一方、E1 は妻に「やってほしいこと

は言ってください」と言ったものの、妻に言われなかったことはやらなかった。

E0:うちの旦那も子育てに関してはすごく積極的ですし、手伝ってはくれるんですけど、家事に関しては、やっぱり女性っていうのはやっぱりあるじゃないですか、あるんですよね。(だから旦那は)主体的にやろうとしているのか(っていえば)そうじゃないですね。

5. 考察

以上、夫妻二人が家庭内の役割を分担し、遂行する際、互いの協力関係や相手の行動を評価したものを示した。本調査は同じ家庭の夫妻両方からペアデータを集めたため、一人一人の思いや考えなどを伺うことができた。それによって夫妻両方から情報収集が可能となり、夫妻間のギャップや互いに役割を分担して遂行する時の効果などを評価できるようになった。結果的に女性が家庭内役割を遂行する主役であり、全体からみれば男性が女性の遂行に満足している。女性が日々役割をルーティンに遂行していることは多くの男性にとって助かったことであると分かった。それでも、分担意識が強く、役割遂行に積極的である男性ほど、女性に対して「もっとやらせてください」という要望が強い。そして男性が家事育児全般の管理から外されることが多く、家庭内の事情がすべてはつきり把握するとは限らないため、相手がなにか手伝ってほしいことがあるとき「はつきり言ってくれれば助かる」ことも分かった。これまで多くの研究は女性の立場から捉えているが、本研究で男性を当事者として取り入れることで、このような知見も得られた。

一方、女性が男性の分担に対して評価する際、本調査の協力者である男性たちは全員育児に積極的で、家事も一定のレベルかかわっていたため、全体的に女性の評価が高い。その中でよく指摘されたのは男性が家事を一つ一つやり、子どもの面倒を一人しか見ないなどのことである。女性の立

場からすると、全般を把握しながら男性に指示を出さないといけないことが面倒だという考えは理解できる。ただペアデータで男性側の声を聞いてみると、妻が全般を把握しているから自分がなにをやればいいのかかわからないこと、妻がすべてやろうとしているからこちらは下手に手を出さないほうがいいのかもしいといったことが分かった。

今後に向けて、夫妻間のコミュニケーションを積極的取ることが勧められる。調査の結果、コミュニケーションの時間を確保し、家事や育児について実際のやり方、分担の仕方、またはそれに関する悩みや自分の考えを詳しく話し合っている夫妻のほうが分担もより効果的であると分かった。前述の不満なども、喧嘩など激しいコミュニケーションを含めて多く行われると、互いの理解が進む可能性も示唆された。

また、このようなコミュニケーションがある前提で、なにか頼まれたときに相手の意図を正しく読み取ってフォローできることも大事である。具体的にいえば、女性は並行作業をよくしているが、家事と育児を同時に行うことの大変さがよく報告される。したがって一部の女性がそのような並行作業を避けるため夫に家事か育児のどちらかを頼んでいたが、この考えを理解した男性のほうがよい分担をしていると評価される傾向がある。

無論、一時的に頼まれたことだけではなく、男性が自分の役割として振り分けられたことを日々ルーティンに遂行すること自体が女性の負担を減らすことに有意義である。その役割を自分ひとりでやりこなせることもまた大事である。女性たちの語りからすれば、男性のやり方が下手だとか、全部うまくできないからしょっちゅうフォローしていかなくてはならないことが逆にストレスをたまるものである。その意味で男性の独立した、かつ安定した遂行が妻たちに求められている。

もう一つ女性に高く評価されたことは自発性である。前述で男性がなにをやればいいのかかわらないと言及したが、実際日々の生活を過ごしている中、比較的うまくできている家庭の共通点は

女性が「やる側」で男性が片付けなど「フォロー側」に回っていることである。即ち女性が男性の遂行を下支えするのではなく、女性が先頭を切ってこれからやることを「見ればわかる」状態にし、男性にどんどんフォローしてもらうことである。その場合、例えば女性が洗濯機を回しおいてあれば、洗濯が終わった服を干し出す男性の分担は効果的だと評価される。実際調査を行ったところ、女性の多くがまだ自分の家庭内役割に対する最終責任を抱いていると分かった。そのため、自分の役割だと思った領域に踏み込んでもらわず、でも積極的にやれることをやってくれる男性が評価されると分かった。この点は男性の立場からも同じで、自分が何かやっているときはやり方などあれこれ言わないでほしいと述べていた。ただ男性の多くは家事や育児について自分が妻を勝ることがないから妻の指摘を認めるが、自分の家事遂行能力に自信のある男性であれば、不満が積もることも考えられる。

6. おわりに

本研究は育児期の共働き家庭に着目し、どのような役割遂行が効果的で、配偶者の負担を減らし、満足度を高め、相手によい評価をされるのかを解明しようとした。そのため、同じ家庭の夫妻二人から質的のペアデータを集めた。一つの家庭で役割が遂行される時の情報を夫妻両方の語りからより完全なデータを取得し、夫妻間で必ずしも意思疎通がされていないことを含め、相手の分担行動を評価してもらった。

その結果、女性だけではなく、男性も配偶者との役割分担や相手の遂行に不満と満足があることがペアデータによって示唆された。さらに、具体的な役割遂行について、夫妻間のコミュニケーションが十分かつ効果的に取られることが大事な前提条件であり、遂行をよりよくするために必要不可欠なものであると分かった。配偶者との話し合いが多く、しかも家事や育児に関係のある話であるほど、相手が思うことや望むことをより理解できる。一方、やる側が日々の遂行経験を積み重

ねるほど、相手が同じことをやっている時に必要とするはずの支援を相手の身になって考えることができる。

一方、特に女性の評価をみると、男性が配偶者から多くの下支えを求めず、エージェンシーを発揮して独立性の高い遂行ができることが重要である。さらに、男性側の自発性が高く、自ら積極的に家事や育児をやってくると精神的、身体的とも助かることが明らかになった。

最後に本研究の意義と不足を整理する。調査においてはペアでデータを集め、婚姻関係の主体である男女両方に意見を伺った。その点でジェンダーの偏りなく議論ができた。より満足度の高い家庭生活作りを考えるため、質的調査で「効果的の分担」の中身を提示することは有意義である。ただ本研究のサンプルが少なく、あくまで事例を示すに過ぎないが、この点について、今後さらなる調査と実証研究が必要であると思われる。

注

- 1) 「夫妻関係満足度」は李 (2008) の研究で「配偶者あるいは配偶者との関係性への主観的な感情、評価」と定義される。また、大和 (2001)、木下 (2004) の研究で同じ意味のことを「結婚満足度」と称する。
- 2) 本研究 (「都市部における共働き夫妻の家庭内役割分担研究」) は基盤研究 C (『女性の貧困』を捉える：世帯内資源配分に着目した実証研究の方法の開発) (課題番号 16k02030 研究代表者：鳥山まどか) の一部である。
- 3) アーネとロマーン (2001) の研究では三つの主要家事 (洗濯、掃除、料理) に注目し家事分担のパターンを作った。三つとも平等に分担するのが「平等型」で、二つ分担するのが「準平等型」である。一つ分担の場合「伝統型」と名付け、ほぼ分担しないで女性の役割にするのが「家父長型」としている。その意味で本研究の調査対象となる五つの家庭がすべて準平等型 (A、B、D、E) か平等型 (C) に当てはまり、男性の分担が進んでいるほうだと考えられる。

引用文献

- Arlie Russel Hochschild (1989) *The Second Shift*, Penguin Book. = アーリー・ホックシールド著、田中和子訳 (1990) 『セカンドシフト—アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社.
- Belsky J. & Kelly J. (1995). The transition to parenthood. New York: Dell. = J ベルスキー、J ケリー、安次嶺佳子訳 (1995) 『子どもをもつと夫妻に何が起こるか』草思社.
- Darlene L. Piña and Vern L. Bengtson (1993) "The Division of Household Labor and Wives' Happiness: Ideology, Employment, and Perceptions of Support" *Journal of Marriage and Family* Vol.55, No.4 (Nov., 1993), pp.901-912.
- ユーラン・アーネ/クリスティーン・ロマーン著 (2001) 日本・スウェーデン家族比較研究会/友子パンソン訳 『家族に潜む権力—スウェーデン平等社会の理想と現実』青木書店.
- 永井暁子 (1992) 「共働き夫妻の家事遂行」『家族社会学研究』4 : 67-77.
- 岩間暁子 (1997) 「性別役割分業と女性の家事分担不公平感」『家族社会学研究』9 : 67-76.
- 松信ひろみ (2011) 「共働き家庭における夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度の規定要因について」『第3回家族についての全国調査第2次報告書』第1巻：家族と仕事（日本家族社会学会、全国家族調査委員会）75-88.
- 大和礼子 (2001) 「夫の家事参加は妻の結婚満足度を高めるか？—妻の世帯収入貢献度による比較」『ソシオロジ』46(1) : 3-20.
- 藤田朋子 (2014) 「妻の家事負担感と夫の家事遂行：記述回答からの分析」*女性学研究* 21 : 142-161.
- 富士谷あつ子、塚本利幸 (2007) 『男女共同参画の実践—少子高齢社会への戦略』明石書店.
- 末盛慶 (1999) 「夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫妻関係満足感—妻の性別役割意識による交互作用」『家族社会学研究』11 : 71-82.
- 末盛慶・石原邦雄 (1998) 「夫の家事遂行と妻の夫妻関係満足感—NSFH を用いた日米比較」『人口問題研究』54(3) : 39-55.
- 木下栄二 (2004) 「結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹、稲葉昭英、嶋崎尚子編 『現代家族の構造と変容—全国家族調査による軽量分析』東京大学出版会 : 277-291.
- 李基平 (2008) 「夫の家事参加と妻の夫妻関係満足度—妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して—」『家族社会学研究』20(1)、70-80.
- (北海道大学大学院教育学院・博士後期課程)